書評

三浦俊介著

『神話文学の展開　貴船神話研究序説』

三浦　佑之

「貴船神話研究序説」という副題をもつ本書は、手堅い研究実績を積み重ねてきた著者三浦俊介氏の最初の単著である。本書「あとがき」によれば、十年前に学位を取得した『お伽草子の研究――『貴船の本地』を中心に――』を核にしているが、博士論文のままではなく既発表論文と未発表の新稿を加えて新たに構想されたものだという。

具体的に初出一覧などを確認しながら書物の構成を概観しておくと、本書『神話文学の展開』は三部仕立てになっている。その内部だが、本書の「核」になっているという博士論文を構成していた論文というのは第Ⅲ部「中世神話『貴船の本地』論」の大部分がそれに該当すると思われる。そして、おもに既発表論文（「旧稿」）のいくつかをまとめた部分が第Ⅱ部「古代中世の神話文学」を構成し、「新稿」によって組み立てられているのが第Ⅰ部「貴船の神々と神話」であると推察できる。

学位論文をそのまま本にするのではなく、さらにその先の高みを目指していることがよくわかる構成になっているが、そこには著者の探究心の強靱さといったものがよく出ているように感じられて好ましい。そしてまた、だれもが使いそうであまり目に触れることのない「神話文学」ということばが表題に用いられているのも、その理由を知って納得させられた。

著者は立命館大学で松前健の薫陶を受けた人である。その師・松前健が常日頃用いていた「神話文学」という概念を受け継ごうとする意志が、この書名を選ばせたのだということが本書の「はじめに」に述べられている。それゆえに、「神話文学」という表題には、松前健という神話学者の、「広義の「神話」を古代的精神文化の言語的表現体としてもっと高く評価すべきだ」という主張と、「戦時中のように、記紀を政治的宗教的な聖典として偏重することに対する反抗心」の表明と、その二つの立場の継承が宣言されているということになる。研究者としての松前健についてはここで改めて説明する必要はないと思うが、戦場での悲惨な体験とそれゆえに抱え込まれた研究に対する良心といった点については、松前の自伝ともいうべき『ある神話学者の半世紀―戦場の死線と戦後の苦闘を越えて―』（近代文藝社、一九九二年）があることを申し添えておく。口承文芸研究に携わる若い研究者にはぜひ読んでほしい一冊である。

さて、著者三浦氏の『神話文学の展開』だが、各部ごとにその内容を紹介しながら評者の感想を交えておきたい。

まず、第Ⅰ部「貴船の神々と神話」は、次の三章で構成されている。いずれも未発表の新稿である。

第一章　神社神話の遡源―貴船神社の神話（1）―
第二章　神社神話の降臨―貴船神社の神話（2）―
第三章　神々の尻尾―神社名における「尾」の意味―

貴船神社というのは、言うまでもないが京都の観光地の一つ、京都盆地の北方の谷間の奥（京都市左京区鞍馬貴船町）に祀られる神社であり、「平安遷都直後、鴨川・賀茂川の上流に当たる貴船川河畔の清泉を祀る社祠に、大和国の丹生川上神社（今の中社）の祭神「罔象女神（みつはのめのかみ）」が勧請されて、山城国における水源地の神としての祭祀が開始された」（四頁）と考えられている。

その貴船神社には、著者が「遡源神話」と名付ける類型のある鎮座起源神話が伝えられており、その神話についての分析が第Ⅰ部の主題となる。「遡源神話」というのは、神が、海辺または天空から船に乗って訪れ、聖地を見つけて鎮座するというかたちをもつ神話で、そのときの乗り物である船が、鎮座地の近くに「安置・放置・廃棄され、多くの場合、岩や山になった」（四頁）というふうに語られている。貴船神社には、古来神社に伝わる『黄船社秘書』（以下『秘書』と略）と呼ばれる書物があり、筆者はそれを閲覧し翻刻しながら「黄船遡源神話」の分析を行ってゆく。その「遡源神話」の部分というのは、『秘書』の内容に著者の解読を加えて説明されている部分を引用すると次のようにな神話になる。

「貴布禰大明神」が黄色い船に乗って「天の御島の崎」より船出して大海原を航行し、あらゆる河を遡上し、源流を探索して聖地に到着して鎮座し、日本の地主神となった。その時の水手楫取が今の「梶取明神」である。

本文には記されていないが、「黄色い船」で到着して鎮座したから、その地を「黄船」というようになったと、地名由来になっているのであろう。そして、今日、奥宮にある「船形石」は黄船を小石で隠してあると言い伝えられている。（一七頁）

第一章では、貴船神社の位置づけから説き起こし、祭神のこと、伏見稲荷大社との関係、貴船神社と賀茂社の遡源神話のこと、日吉神社と遡源神話のことなど、さまざまな方向に論を展開させて貴船神社の「遡源神話」に迫ろうとする。そのなかで、黄色い船という神話の説明に関して、「黄」という色彩語彙が古代には存在しなかったことなどに注目しながら、黄色い船に乗ってきたというのは元からの神話ではないと著者は考える。そして、貴船神社には「白専女」「白髭」「白石」など「白」の名をもつ末社が三社もあるところから、もともと彼らは、「白・シラ」の一族だったのではないかと見通すのである。そして、そのシラ・白というのは、渡来系の人びとをさすことばであり、「白」の一族の社として、貴船神社は存在したのではないかというのが、著者三浦氏の一つの結論である。

「黄」は日本語にないというのはわかる

として、そこから「白」が目立つから元は白だったのではないかという展開は、評者の整理のしかたに乱暴なところはあろうが、いささか飛躍があるのではないかという印象を拭いがたい。ただ、船に乗って神が海の彼方からやってくるという神話の背後に、渡来系の人びとを想定するのはむずかしいことではない。たとえば、日本書紀に伝えられた神話のなかの一書には、スサノヲ（素戔嗚尊）とその子イタケル（五十猛神）が朝鮮半島から泥の船に乗り、木種を携えてやってきて、日本列島を緑の島に成したという神話が伝えられている（第八段一書第四）。その泥（土）の船というのは色彩としては黄色（大地の色）なわけで、まさに「黄船」だともいえる。

神話というのは思いもかけない飛躍をするから、黄色が白になってもいいかもしれないのだが、貴船神話の場合、「貴船」という表記は新しいとしても（統一されたのは明治になってかららしい）、「貴布禰」という音仮名が頻用されるなど「き」という音はそう簡単に外せないのではないかという思いが遺るのも事実だ。とすれば、「き」という音のなかで別のことばを探してみることも必要なのではないか。とすると、「き」船は、「黄色い船」であった前は「木の船」だったという可能性も浮上するのではないか。それでは当たり前すぎて神話にはならないと言われるかもしれないが、神も「木船」に乗ってやってきてもいいのではないか。なお、「キ＝木」は上代特殊仮名遣いでは乙類に属する仮名だが、「貴」も「黄」も乙類の中として用いられる文字である。

何が正しく、読めない部分をどのように説明するか。その可能性は、いくつもありうるわけで、三浦氏の言う「白・シラ」という説明は一つの仮説として認めつつ、それをどのように後付けることで証明してゆけるかというところの説得力のある展開を期待したい。

第二章では、貴船神社の社人である「舌氏」が、「自分たちの先祖は天界から降臨してきた。四代目まで鬼形をしていた。先祖は鬼、牛鬼だった」（四九頁）という伝承に注目し、賀茂や日吉など周辺の降臨神話と比較しながら、深く分析を加えてゆく。そして著者は、山上の神秘的な岩石などに注目しつつ、「貴船神社の降臨神話」が、「牛鬼」や「百合若大臣」などいくつもの要素を導入しながら組み立てられた「祭神鎮座由来譚」であるとともに、「舌氏の始祖神話」としても組み立てられているさまを解明してゆく。神話が、さまざまな要素を組み込みながら、展開あるいは成長してゆくというのは、おそらくあらゆる場合に認められるあり方だろうと思われる。

著者三浦氏は博学の人であり、時代は古代にも中世にも、分野としては文学にも民俗学にも神話にも自在に往き来するところがあり、そこで本領は発揮されるのだが、第三章の「神がみの尻尾」という論考は、その象徴的な産物である。地名によく出てくる「尾」という語を諸書に求め、「尾」の意味を考えようとする論考で、それはそれで興味深い。しかし、せっかく展開してきた「貴船神社遡源神話」とどうつながるのかという点では、少々はぐらかされたような印象を与えられてしまう。論文の並べ方

や全体の構成を工夫すれば、そういう印象は薄められるのではないかと思うのだがいかがか。

さて、本書の中間に置かれた第Ⅱ部「古代中世の神話文学」には、次の四本の論文が置かれている。

第一章　記紀神話の構成―神話対照表を読む―

第二章　中世神話と和歌・注釈書―藤原良経「天の戸を」歌と天岩戸神話異伝―

第三章　仏教神話の転生―四天王・吉祥天女前生譚―

第四章　仏教神話の軌跡―美女を救った技能者たち―

第一章を除くと、以前の書き物に手入れをした論考のようである。しかも、相互に緊密な連絡があるわけではなく、それぞれ独立した論文として存在する。それらの論考は著者の該博な知識と探究心がよくあらわれている論文で、いずれも読んでいて教えられることが多く興味深い。しかし、「貴船神話研究序説」という本書の副題に先導されて読み進めてきた者にとっては、第Ⅱ部に置かれた諸論は貴船神話研究ではないではないかという疑問をもってしまう。論文集だとわかって読むのと、「貴船」という興味を持って読むのとでは、読み方がぜんぜん違うのではないか。そういう点では、書名（副題を含めて）をどう付けるかというのは、研究書にあっても存外に大きなことではないかと思う。

また、わたしの能力では、中世神話や仏教神話への言及はむずかしいところがあり、ここでは、おもに第一章についてふれたい。

古事記と日本書紀の神話について、「神話対照表」を作成した上で、両社の関係について論じている。対照表自体は、著者もふれているとおり何人もの研究者が作成し、それぞれに分析を行っている。かく言うわたしも、簡略な対照表を作成し、それに基づいて古事記と日本書紀との違いについて縷々論じているので、「対照表」の作成が、たいそう重要な役割を果たすというのはよく承知している。しかも対照表というのは、それぞれの研究者の、何を強調したいのか、どのようなことを考えてみたいのかという方向性によって、当然、その表の作り方も違ってくるものである。それゆえに、著者の作成した対照表が妥当か否かというような評価はできない。「表」から何が引き出されてくるかというところに興味が向くだけである。

ここで著者三浦氏が見いだしてきたのは、日本書紀の神代巻のあり方としての、「本書補強の法則」「前方優先の法則」「系譜重視の法則」の三法則である。ちなみに「本書」というのは、日本書紀巻一、二に撰録された神話において「正伝」あるいは「本伝」という位置付けのもと、各段冒頭に配された神話のことであり、「前方」というのは、日本書紀の一書として配された何本もの神話のうちの前方ということである。著者によって提示された三法則の正否に関しては、ここでにわかに判断を下すことはむずかしい。一つの仮説として提出された

ものであり、今後の研究のなかで検討されるべきことかと思われる。

ここにそっと書き添えさせていただくが、わたしの立場からすると、著者が本書で断りながらも用いている「記紀」という表記は、いかに断りを入れたとしても承服しにくいところが遺る。古事記と日本書紀とは明確に区別するところから研究をはじめたいと思うからである。

紙幅も尽きそうになってきたので最後の第Ⅲ部「中世神話『貴船の本地』論」に移るが、この部分は六章と補遺一篇から成っている。

第一章　鬼の名と『法華経』
第二章　転生再会の方法
第三章　地鎮の呪法―家を七七に造ること―
第四章　鬼を食う五節供
第五章　鬼殺しの年中行事―節分・門松・左義長―
第六章　中世神話『貴船の本地』と貴船神社
補論　漢字「鬼」と和語「おに」についての基礎的考察

おそらく、提出された学位論文の中心を占めていた論考群と思われる。そして、扱われているのは、『貴船の本地』と題され、異本も多く伝えられる中世短編物語（いわゆるお伽草子）の一篇である。その内容は、筆者の紹介を借りて述べると、当初、結婚を拒んでいた男主人公「本三位の中将さだひら」が、絵に描かれた美女に見ぬ恋をし、鞍馬山の奥にある鬼国の姫「こんつ姫」（食人鬼の王である異形の父と娘の運命を案ずる母とのあいだに生きる鬼娘）に出会い、いざなわれて異郷訪問をし、その姫との離別・再会・婚姻の末に、ふたりは貴船の神となって顕れるという本地物になっている（二六七頁など）。その中世の本地物を取りあげながら、第一章では、鬼の両親と姉や娘本人の名の由来を探求し、『法華経』との関係に着目してその由来を明らかにしてゆく。また第二章では、異類婚姻譚に分類できる『貴船の本地』でありながら、日本の神話や昔話にはほとんど見いだせない「転生再会の説話」であることを指摘したうえで、類似の物語として存在する『鶴の草子』『あま物語』を取りあげて比較検討した上で、『貴船の本地』の特質を、「本来であれば短編で終わってしまうはずの恋愛悲劇が、転生の発想を導入することによって、物語の現在を過去世との因果関係の揺らぎの中で捉えた、読み応えのある長編へと昇華」したのだと評価する（二七八頁）。

第三章以下の論考では、『貴船の本地』にあらわれる「地鎮」の呪法や五節供における鬼を食うとか鬼殺しとかの習俗について取りあげ、その呪法のよって来たる理由や節供の儀礼に関して、民俗学あるいは民間習俗、民間宗教などの知識を総動員しながら、詳細な紹介と分析を加える。そして第六章に至って、『貴船の本地』の成立背景でもある中世の貴船神社の祭神についての考察を置き、スサノヲやイワ（ハ）ナガヒメに関する伝承、弁財天や客人神へと話題を転じながら、『貴船の本地』の周縁を明らかにしてゆこうとする。

三浦俊介氏の方法は、あることがらに目を着けながら、そこからさまざまな方向へと射程を伸ばし、周縁を巡りながら話題を広げてゆくなかで、主題に目星を付けてゆくという方法をとろうとする。おそらくそれは、著者の該博な知識のなせる技だと思うのだが、その広がりが、ある場合にはどこに連れて行かれるのかわからなくなり、著者の主張を見えにくくしてしまうことにもなる。むろん、それはこちらの知識不足によって著者に付いていけないだけのことであり、本書が述べようとしていることがらに抜かりはない。ただ、貴船神社と貴船にかかわる神話や物語を対象にして一書を編むということであれば、第Ⅱ部に置かれるべき論考に関しては、今一段の工夫があるとよかったのではないか。それはおそらく「序説」という語が外された次の著作に期待すべきことかもしれないのだが。

二〇一九年六月　思文閣出版刊
本体一二〇〇〇円

（みうら・すけゆき／東京都）

書評

重信幸彦著

『みんなで戦争　銃後美談と動員のフォークロア』

伊藤　龍平

重信幸彦という名前が世に出たのは、最初はジャン・ハロルド・ブルンヴァン『消えるヒッチハイカー』（一九八八年、新宿書房）の訳者の一人として、次に論文「「世間話」再考――方法としての「世間話」へ」（『日本民俗学』一八〇号、一九八九年）の著者として、である。柳田國男が没して四半世紀、従来の研究メソッドが通用しなくなりつつあり、新しい民俗学の方向性が模索されていたころ、少壮の重信は、世間話研究の旗手として世に現れた。私が重信の名を知ったのは大学進学後の一九九二年だが、その時代の「空気」は充分に感じられた。この「空気」という語こそが、本書のテーマとなっている。

ハナシの場には、それぞれに特有の「空気」がある。笑話には笑話の、怪談には怪談の、哀話には哀話に特有の「空気」があり、話し手も聞き手もその「空気」によって話す／聞くモードを決定づけられる。上手な話し手は、巧みにその場の「空気」をつかみ、さらには「空気」を作る。聞き手も、場の「空気」を読み、敏感に「空気」に反応する。その「空気」は時代によって作られることもある。時代の「空気」は日常に存在するものだが、「空気」の譬えどおりに、平素はさほど意識されない。それが強く意識されるのは非常時においてだ。本書のテーマである銃後美談も、総力戦という非常時の「空気」の中で生まれた。

先述したように、重信の研究歴は、世間話への眼差しから始まった。一口に世間話の研究といっても、「世間」の研究に傾く人と「話」の研究に傾く人がいる。一長一短